

長 峰 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第185集

1988

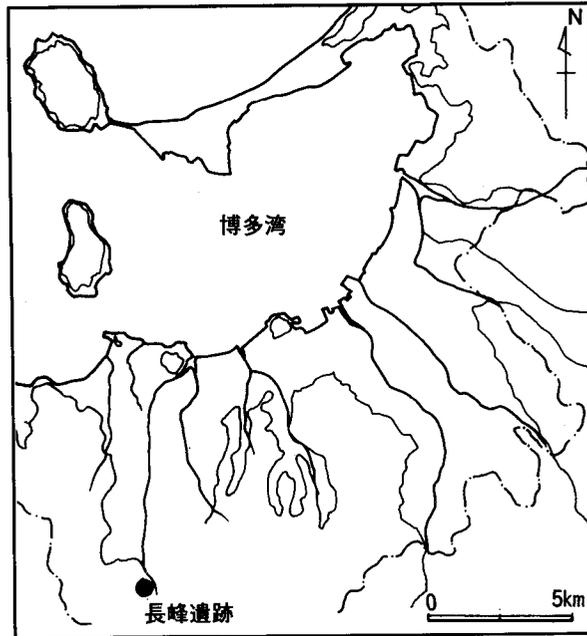
福岡市教育委員会

長峰遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第185集 正誤表

頁	行	正	誤
1	3	1985(昭和60年)	1985(昭和60)年
	5	福岡市埋蔵文化財地図	福岡市文化財分布地図
3	16	墓城	墓域

長峰遺跡

福岡市早良区東入部所在遺跡の調査



遺跡略号 NGM
遺跡調査番号 8642

1988年3月

福岡市教育委員会

序

室見川上流域には今なお豊かな自然と文化遺産が残されており、市民の憩いの場として広く親しまれているところです。本書は昭和61年度に福岡市早良区東入部の長峰児童公園建設に伴う発掘調査の成果をまとめたものです。本書が文化財に対するご理解を深めていく上で広く活用されるとともに、学術研究の分野において貢献できれば幸いです。発掘調査から資料整理にいたるまで地元関係者をはじめ多くの方々にご協力に対し、心から謝意を表します。

昭和63年 3月31日

福岡市教育委員会
教育長 佐藤善郎

例 言

1. 本書は福岡市都市計画局（現都市整備局）公園計画課による長峰児童公園建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が昭和61（1986）年度に発掘調査を行った長峰遺跡の調査報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測は、佐藤一郎、山村信栄、撮影は佐藤があたった。
3. 本書に掲載した遺物の実測は、佐藤、久保寿一郎、撮影は松村道博があたった。
4. 製図は佐藤、藤村佳公恵が行った。
5. 本書に使用する基準方位は、第1図の他は磁北で真北との偏差N-6°40'-Wである。
6. 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

本文目次

序文

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織	1
II	遺跡の位置と環境	1
III	発掘調査の概要	3
IV	遺構と遺物	4
1	検出遺構	4
2	出土遺物	11
V	小結	16

挿図目次

	本文頁
第1図 周辺の遺跡	2
第2図 長峰遺跡と周辺の遺跡	3
第3図 遺構配置図	折り込み
第4図 南壁・西壁・旧谷部土層実測図	折り込み
第5図 SB01・SB10実測図	5
第6図 SB11・SB13実測図	6
第7図 溝実測図	8
第8図 SE03実測図	9
第9図 石組み地形実測図	10
第10図 土壇実測図	11
第11図 遺物実測図(1)	13
第12図 遺物実測図(2)	14

図 版 目 次

図版 1	調査区全景	1. 西から	2. 南から
図版 2		1. SB01 (西から)	2. SB10・SD02 (北から)
図版 3		1. SB13 (北から)	2. SE03・石組み地形
図版 4		1. SE03 (西から)	2. SE03断面 (西から)
		3. SE03 石組み近景 (西から)	
図版 5		1. SK07 (南から)	2. SK08 (西から)
		3. SD06土層 (北から)	4. 懸仏出土状況 (西から)
図版 6	出土遺物(1)		
図版 7	出土遺物(2)		
図版 8	出土遺物(3)		

I はじめに

1 調査にいたる経過

1985（昭和60年）福岡市都市計画局公園計画課から埋蔵文化財課に対し、早良区東入部字飛熊714～3他の児童公園建設予定地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。申請地一帯は、甕棺片の散布地として知られ、1979（昭和54）年に刊行された『福岡市埋蔵文化財地図（西部Ⅰ）』には長峰甕棺遺跡として記載・周知化されている。申請を受けて埋蔵文化財課では同年11月6日に試掘調査を実施した。用途面積1652㎡の内、すでに削平を受けている北側を除く1100㎡の範囲で遺構・遺物が検出され、調査の対象区域とした。協議の結果、1986（昭和61）年10月9日より発掘調査を開始した。

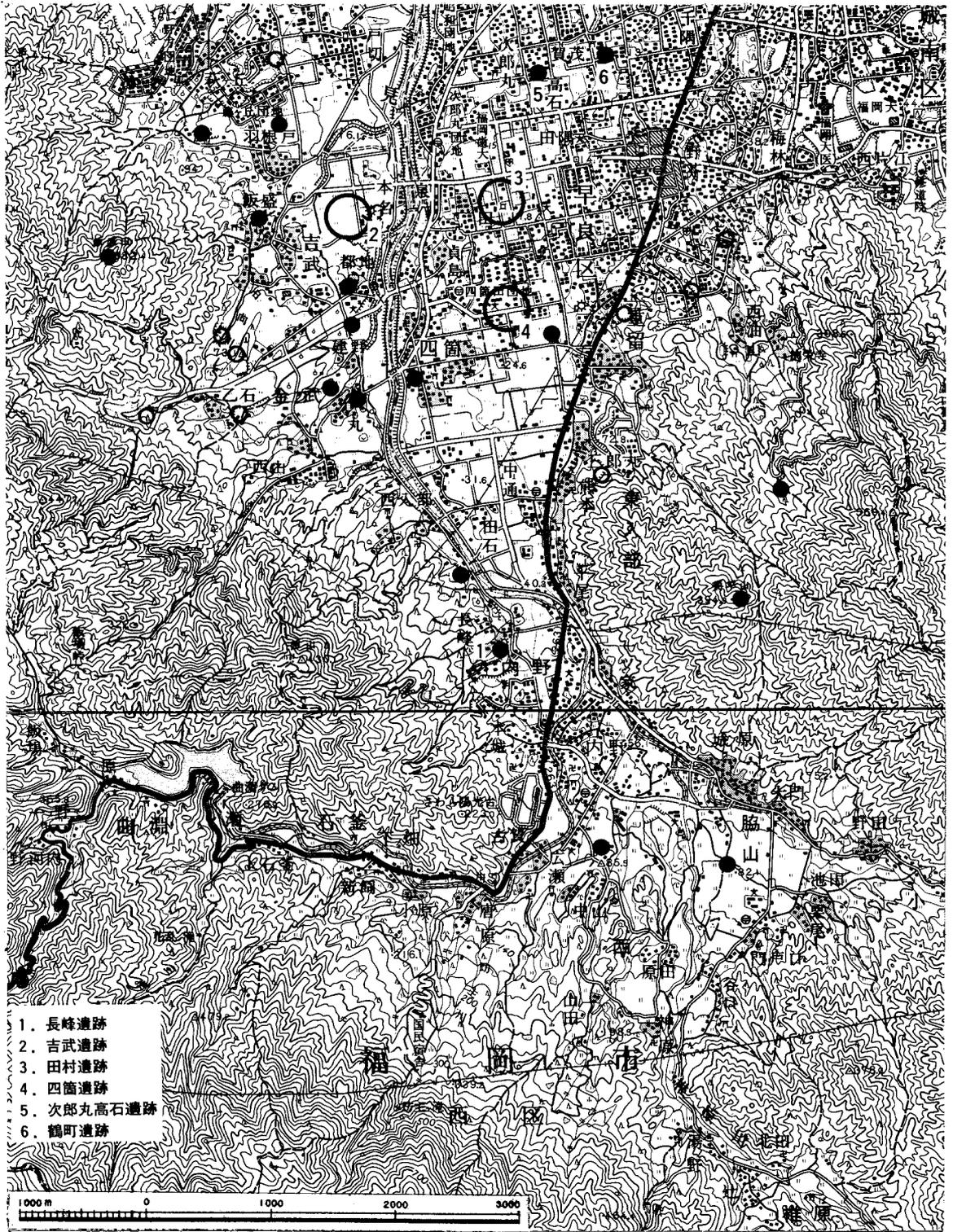
2 調査の組織

調査委託	福岡市都市計画局公園計画課
調査主体	福岡市教育委員会埋蔵文化財課第1係
調査総括	埋蔵文化財課長 柳田純孝 第1係長 折尾学
事務担当	岸田隆
調査担当	池崎讓二・杉山富雄（試掘調査）・二宮忠司・佐藤一郎（発掘調査）
調査補助	山村信栄（現太宰府市教育委員会）
発掘作業	牛尾豊・柴田大正・白坂武士・樋口義秀・平野千秋・結成弥澄・伊藤みどり・牛尾秋子・牛尾しきよ・牛尾奈美枝・牛尾二三子・大内文恵・倉光ナツ子・榊スミ子・白坂フサヨ・惣慶トミ子・多田映子・鍋山千鶴子・樋口信代・樋口トシエ・樋口洋子・福田稲子・藤永幹子・細川ミサヲ・三好道子・山西人美・結城シズ・結城千賀子・結城信子
整理補助	藤村佳公恵
整理作業	有吉千栄子・南里三佳・平田ミサ子・藤崎洋子

プレハブの設営、排土置き場の確保等に関し、地元の方々のご理解とご協力によって、調査が円滑に行われ、無事終了したことを感謝します。

II 遺跡の位置と環境

長峰遺跡は室見川の上流域、背振山系から長垂山へ南北に連なる山塊から東に突出した低丘陵に位置する。扇の形状をとる早良平野の要にあたる部分を東にのぞむ。当遺跡の北方約700mの西入部字白塔からは、1963年の豪雨の際に人面付銅戈が発見されている。註1) 室見川上流



第1図 周辺の遺跡 (1/5万)

域での本格的な考古学調査は、1984年に分布調査を行って以来、まだ端緒に付いたばかりである。1986年からは脇山地区で圃場整備事業に伴う発掘調査^{註1)}、1987年には大字西で児童公園建設に伴う発掘調査が行われている。室見川上流地域は、山岳信仰の中心地として中世に権勢を誇った背振山の北麓にあたり、中世文書にその名が見える地名が現在なお多く残る。長峰もその例外でなく、早良区東入部の小字名として残る。

註1) 福岡市教育委員会『有田遺跡第2次調査報告』1968

2) 福岡市教育委員会『福岡市文化財分布地図(西部Ⅲ)』1984

Ⅲ 発掘調査の概要

発掘調査は10月9日にバックホーによる表土剥ぎから開始した。調査区北側では耕作土、床土の下から遺構が確認されたが調査区のやや南側に旧谷部があり、西から東へ流下しており、谷の埋土上に遺構が確認された。調査区南側中央には遺構上面に包含層が残り、その掘り下げの際懸仏が出土し、石組みの井戸、地形の遺構を検出した。調査区を中央から北側にかけては、掘立柱建物5棟、その内の一棟の周囲にコの字状に廻る小溝、土壇を検出した。当遺跡は分布地図には長峰甕棺遺跡として記載されているが、当調査区内では甕棺片を表採したのみで、甕棺に関する遺構は検出されなかった。調査区外北側の高まりの土砂が崩壊している断面に甕棺がみられ、当調査区は墓城を外れるか、後世の削平を受けたと考えられる。谷埋土上の遺構の記録終了後、11月26日より谷部掘り下げ12月7日に遺構実測、写真撮影終了、12月11日に埋め戻し終了した。



第2図 長峰遺跡と周辺の遺跡 (1/8000)

IV 遺構と遺物

1 検出遺構

掘立柱建物

SB01 (第5図、図版2)

D-1・2区で検出した。梁間2間、桁行3間の南北に長い建物である。梁間は全長3.8m、柱間寸法は1.9mの等間隔、桁行は全長6.7m、柱間寸法は2.2m前後の等間隔である。柱穴掘り方は円形で、径25～35cm、深さ8～18cmを測る。柱痕跡の径は12～15cmを測る。方位はN-15°-Wにとり、床面積は、25.5㎡を測る。

SB10 (第5図 図版2)

A・B-2・3区で検出した。梁間2間、桁行3間の南北に長い建物である。梁間は全長4.45m、柱間寸法は2.2m前後の等間隔、桁行は全長6.4m、柱間寸法は2.0m・2.4m・2.0mと中央が広い。柱穴掘り方は円形で、径26～33cm、深さ8～36cmを測る。柱痕跡の径は12～22cmを測る。方位はN-8°-Wにとり、床面積は、28.5㎡を測る。この建物の東側を除いた周囲を小溝SD02が廻っており、溝の中心との間隔は2.0mを測る。柱穴の底面の高さはいずれもほぼ同じ水準高で、南側にいくにつれて浅くなっており、後世の削平の度合を知る目安となろう。

SB11 (第6図)

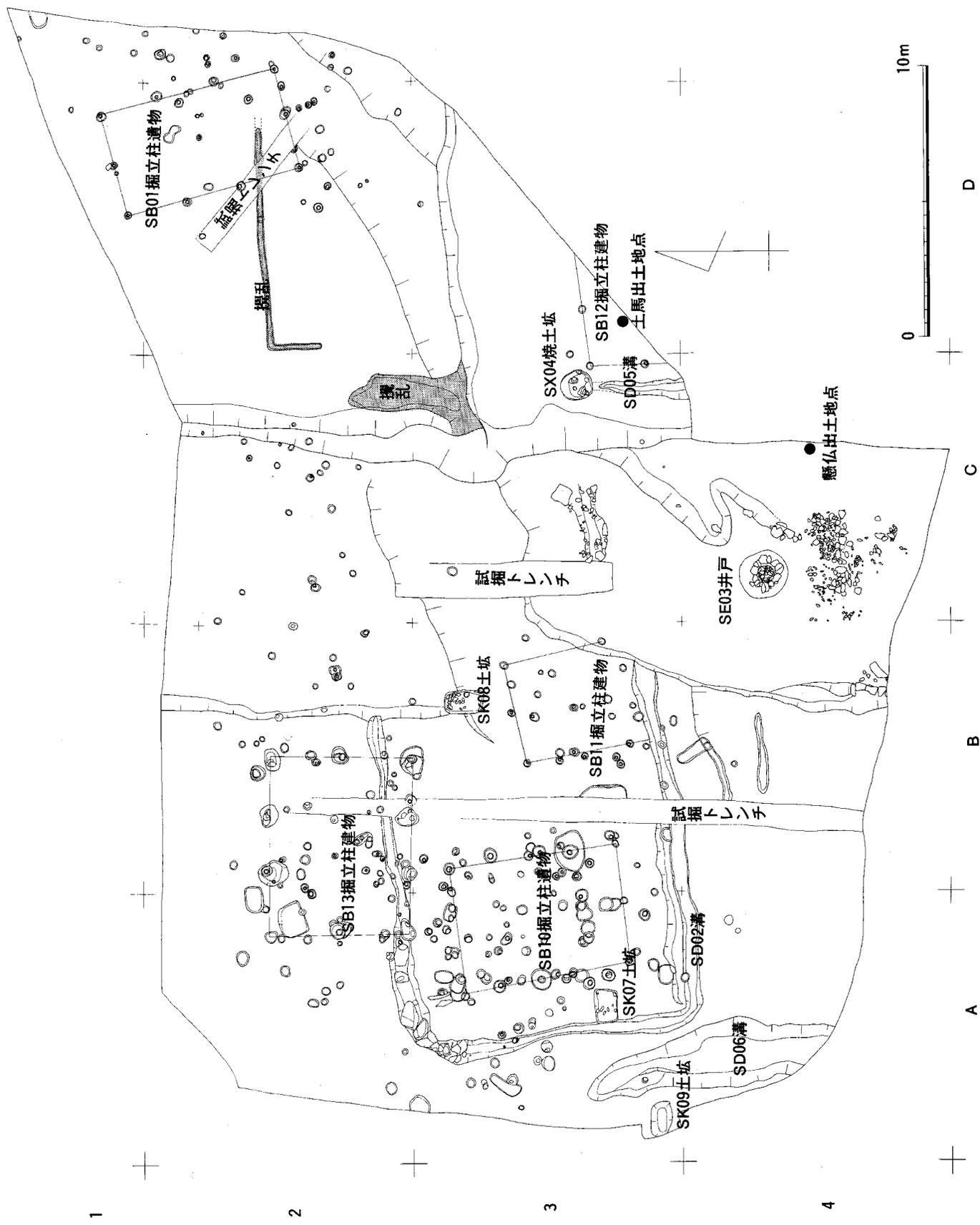
B-3区で検出した。梁間2間、桁行2間以上の東西に長い建物で、桁行の東側は棚田造成による後世の削平を受けており、全体規模は不明。梁間の全長は3.7mを測る。柱穴掘り方は円形で、径24～32cm、深さ12～25cmを測る。柱痕跡の径は5～22cmを測る。方位はN-9°-Wにとる。北桁行の西から2番目の柱穴は検出できなかった。

SB13 (第6図、図版3)

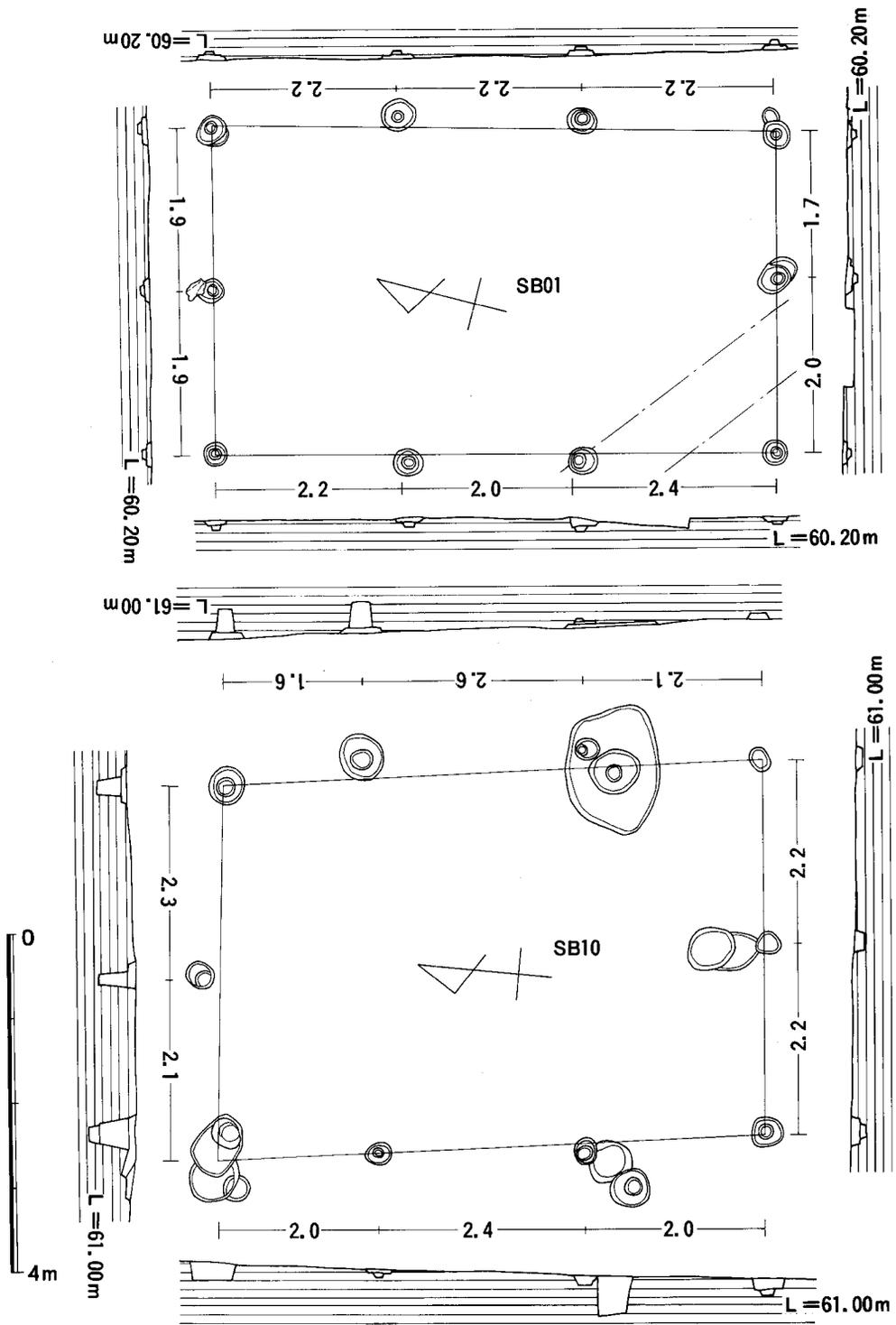
A・B-2区で検出した。梁間2間、桁行3間の東西に長い建物である。梁間は全長5.2m、柱間寸法2.6mの等間隔、桁行は全長6.4m、柱間寸法は2.2m・2.0m・2.2mと中央が狭い。柱穴掘り方は不整形で、径60～120cm、深さ40～60cmを測る。柱痕跡の径は24～32cmを測る。柱穴底面に偏平な石を根石として据えるものがみられる。1個の柱穴に根石が2個みられることは、柱穴掘り方の平面が不整形であると考え合わせると、建て替えがなされたことが想定されよう。上面での平面形確認の際に切り合い関係をつかめた柱穴もみられた。方位はほぼ真北にとり、床面積は33.3㎡を測る。南桁行の柱穴がSD02を切っている。

SB12

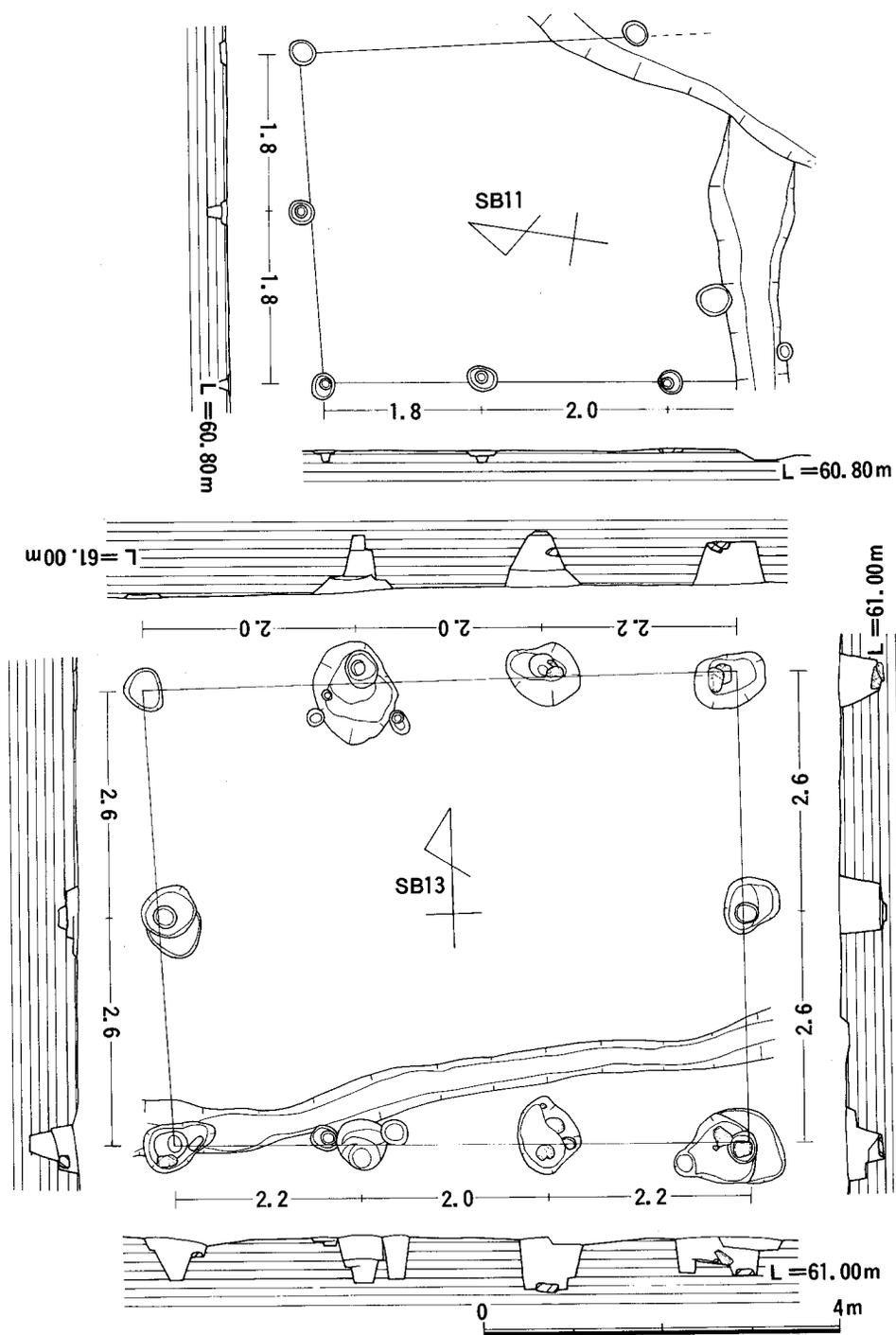
C・D-3区の調査区際で、3個の柱穴が2.0mの間隔で互いに直角な配置をとり、建物の北西隅が調査区内にかかるかの様相を呈するが、建物としてまとめるには疑わしい。



第3図 遺構配置図 (1/200)



第5図 SB01・SB10実測図 (1/80)



第6図 SB11・SB13実測図 (1/80)

溝

SD02 (第7図、図版2)

調査区の西半部で検出したコの字状に廻る溝である。溝は幅0.3~1.2m、深さ5~22cmを測る。先に述べた通り、SB10と主軸の方位を同じくし、N-8°-Wにとる。東側は後世の棚田造成による後世の削平を受けているため、全体規模は不明。方形に廻る溝であった可能性も考えられる。南北方向の全長11.5m、東西方位の残存する長さは、20.5mを測る。南側の東西方向の溝は棚田の段により4mほど途切れている。溝底部の水準高は西から東、北から南へ低くなっている。北西隅では、溝を掘り込む際に60~100cmの石を抜き取った痕跡がみられた。SB13とSK07に切られている。溝の中心とSB10の間隔が2.0mの等間隔で、主軸の方位を同じくすることから、SB10の雨落ち溝と考えられる。

SD05

C-3区で検出した。幅70cm、深さ10cmを測る。南側は調査区外へ延びる。延長3.2m分検出した。SB12を建物とすれば、その西側の雨落ち溝と考えられる。溝底部の水準高は北から南へ底くなっている。方位はほぼ真北にとる。

SD06 (第7図、図版5)

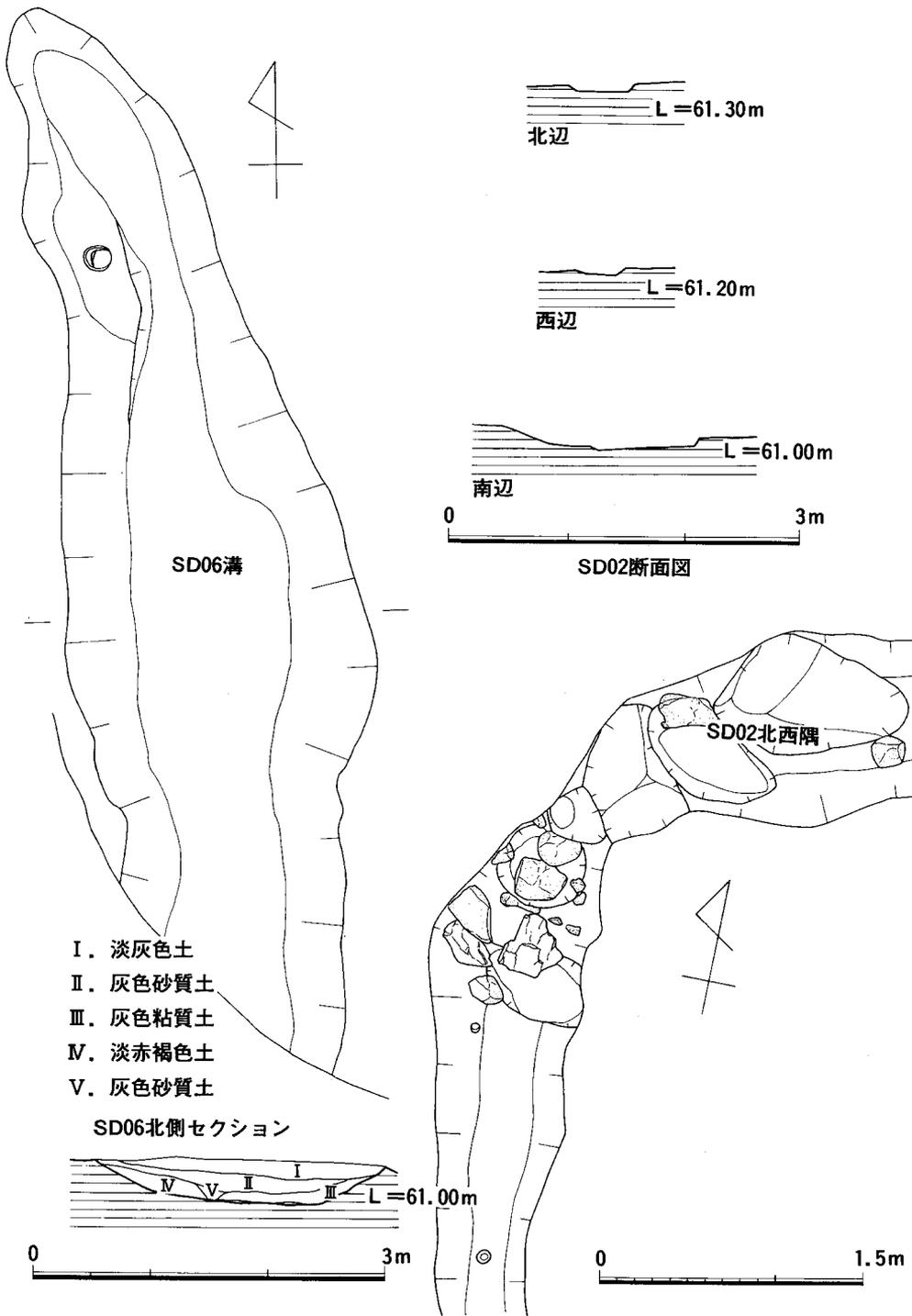
調査区の北西端で検出した。幅2.5m、深さ50cmを測る。南側は調査区外へ延びる。延長9m分検出した。

石組み地形 (第9図、図版3)

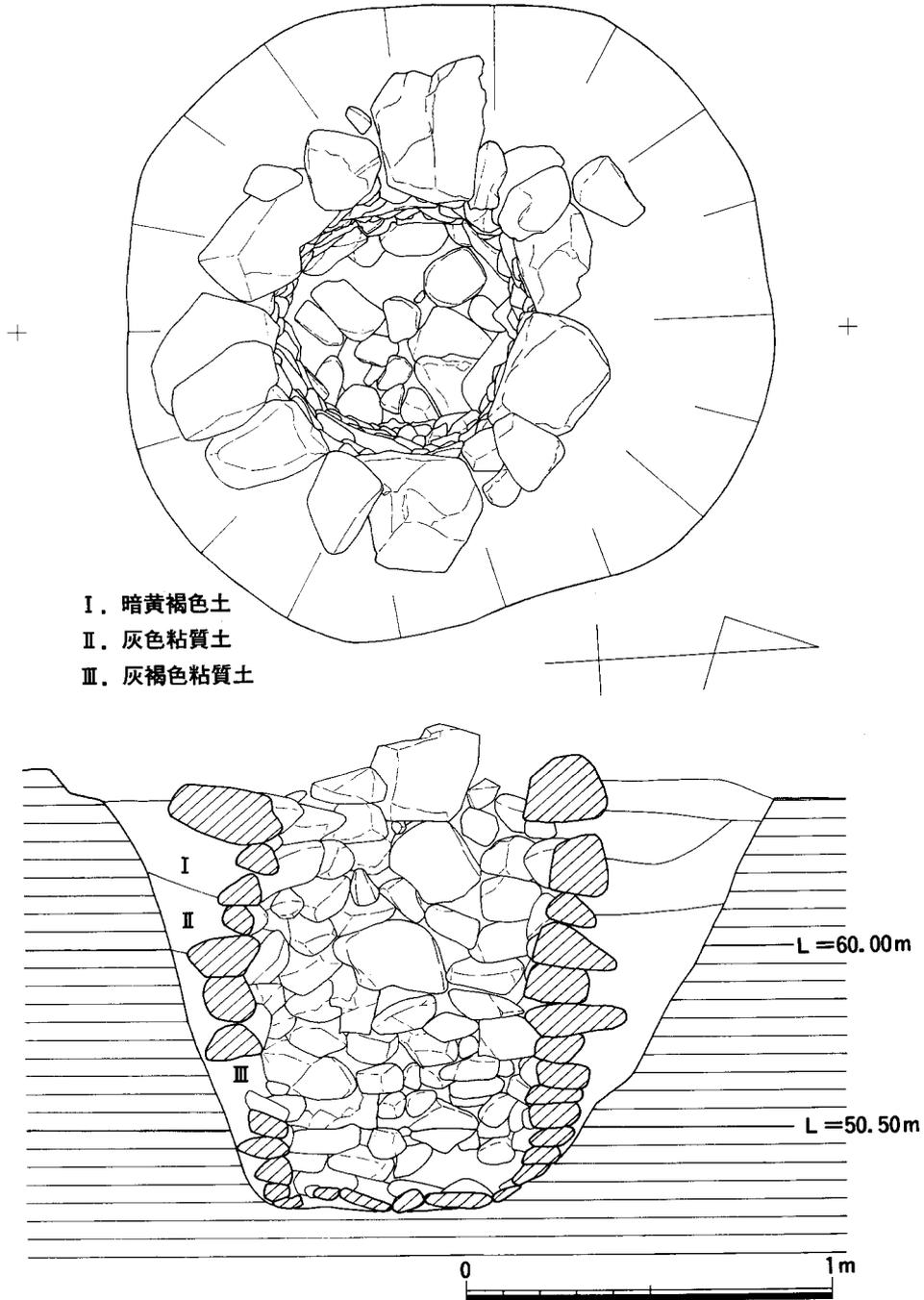
調査区の南側中央で南東隅を検出した。河原石、角礫が図に示すように敷きつめられている。東辺と井戸の中心との間隔1.8m(6尺)、南辺と井戸の中心との間隔は3.6m(1丈2尺)を測り切りよい数値をとることから、井戸、もしくはその覆屋に伴なう地形と考えられよう。井戸枠内に使用石材とみられる石が多量に落ち込んでおり、井戸自体かなりの削平を受けたと考えられ、地山からさらに上部に石組みや盛り土を行なったと考えられる。石の隙間には土器片がみられる。主軸の方位はN-8°-Wにとり、SB10・SD02と同じくする。南辺中央部は崩壊し、その南側に崩れ落ちた石が散在している。

井戸 SE03 (第8図、図版3・4)

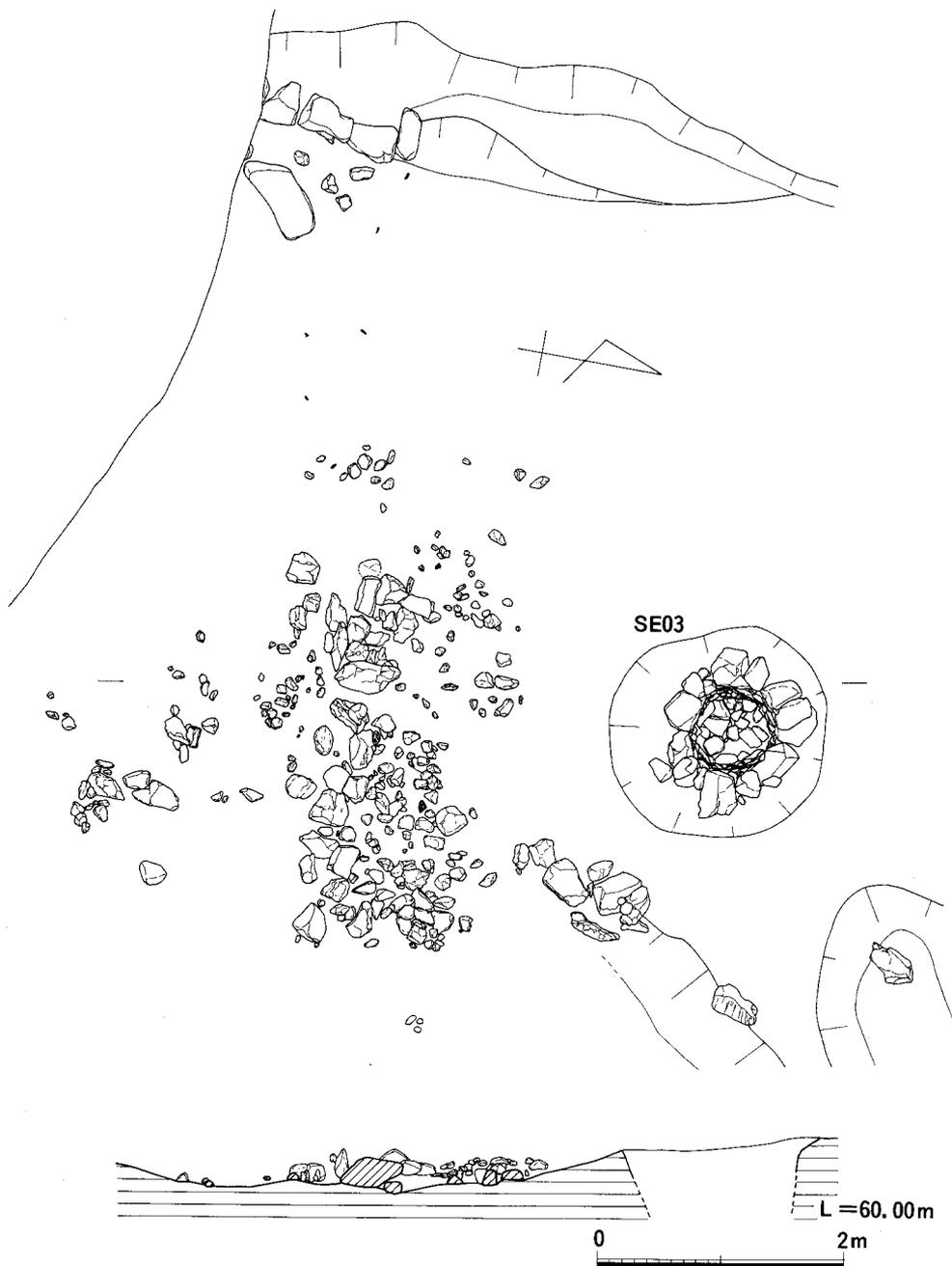
C-3区で検出した。直径180cmの円形の掘り方の中に井戸枠が石組みで構築されている。石組みの上端の内径は65cmで、構築されている石材は上端では人頭大であるが、下位になるにつれて小さくなる傾向を示す。石組みは上端から底までの120cmの深さまでみられ、底面には偏平な石を敷きつめている。井戸枠は、底径(内径)60cmを測り、ほぼ垂直に構築されている。掘り方の底径65cmを測る。井戸枠内には石組みの使用石材とみられる石が多量に落ち込んでいた。



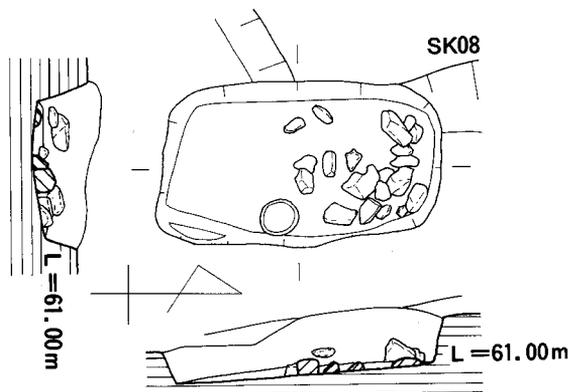
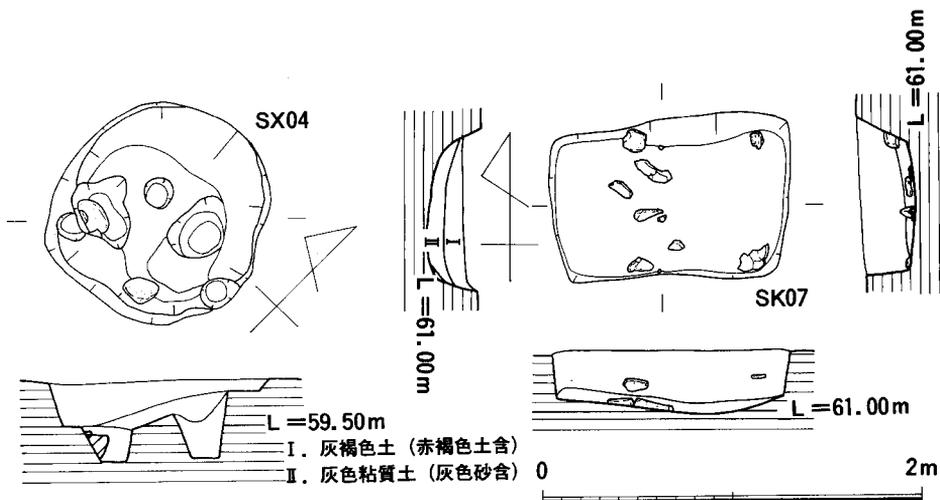
第7図 溝実測図 (1/60・1/40)



第8図 SE03実測図 (1/20)



第9図 石組み地形実測図 (1/60)



第10図 土坑実測図 (1/40)

土坑

SX04 (第10図)

C-3区で検出した。平面形は円形を呈し、上面径115cm、深さ23cm、底面径25cmを測る。埋土には炭化物を含み、壁面は堅く焼き締まっていた。ピット状の掘り込みがみられるが、この土坑に伴うものであるかは不明。

SK07 (第10図、図版5)

A-3区で検出した。東西に長い方形を呈し、長さ120cm、幅85cm、深さ40cmを測る。南北の主軸よりやや西寄りには、底面に接して10cm前後の石がみられる。方位はほぼ真北にとる。SD02を切っている。

SK08 (第10図、図版5)

B-2区で検出した。南北に長い方形を呈し、長さ140cm、幅90cm、深さ33cmを測る。北半部の底面に接して、10cm前後の石がみられる。底面東側中央にピットがみられるが、この土坑に伴うものであるかは不明。

2 出土遺物

SD02出土土器 (第11図、図版7)

土師器小皿、杯、白磁椀片、同安窯系青磁椀片、陶器捏鉢片、長瓶片が出土した。

土師器 底部は糸切りで板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。

小皿 (1~8) 口径7.8~10.0cm、底径6.0~8.8cm、器高0.9~1.4cmを測る。

杯 (9~11) 口径14.7~15.0cm、底径10.4~10.8cm、器高3.1~3.8cmを測る。

白磁椀 (12)

青磁椀 (13・14) 13は同安窯系青磁椀、14は軽く外反する口縁片である。

陶器

捏鉢 (15) 胎土には砂粒を多量に含み、明赤褐色を呈する。

長瓶 (16) 口縁部片で、釉は褐色で、胎土は灰色を呈する。

SD06出土遺物 (第11図、図版6・7)

茶臼 (17・18) 砂岩製で、17は受皿部である。

SB10出土土器 (第11図、図版7)

土師器特小皿 (19) 底部は糸切り、外面体部から内部まで横ナデ、器周残 $\frac{1}{4}$ からの復元、口径5.8cm、底径4.2cm、器高1.2cmを測る。

SB13出土土器 (第11図、図版7)

土師器杯 (20) 底部は糸切り、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。器周残 $\frac{1}{2}$ 弱からの復元、口径15.6cm、底径11.7cm、器高2.6cmを測る。

Pit 出土土器 (第11図、図版7) 建物を構成する柱穴以外について述べる。床東や鎮壇の性格をもつ土器埋納遺構に伴うものか。

土師器 底部は糸切り、外面体部から内底まで横ナデ。22~24の体部は外反し、底部との境は鋭い。

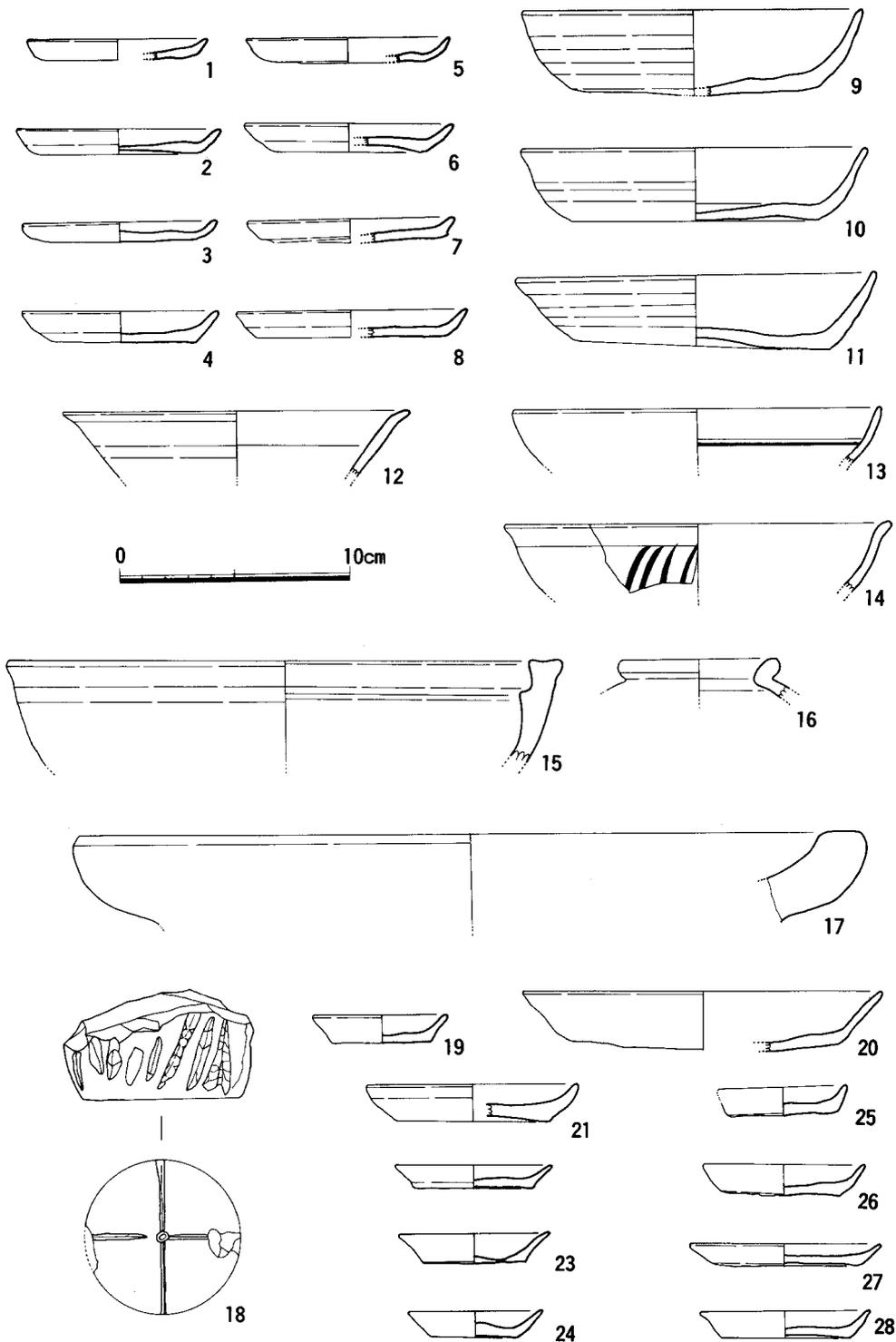
特小皿 (23~25) 23は器周残 $\frac{1}{4}$ からの復元、口径6.6cm、底径4.5cm、器高1.3cmを測る。Pit 62 (A-2区) 出土。24は器周残 $\frac{1}{6}$ からの復元、口径5.8cm、底径3.6cm、器高1.2cmを測る。Pit 112 (A-3区) 出土。25は器周残 $\frac{1}{2}$ 弱からの復元、口径に対する底径の比が高い。口径5.7cm (復元)、底径4.8cm、器高1.3cmを測る。Pit115 (A-3区) 出土。

小皿 (21・22・26~28) 21は口径 (復元) 9.2cm、底径 (復元) 6.5cm、器高1.7cmを測る。Pit49 (A-2区) 出土。22は器周残 $\frac{1}{4}$ からの復元、口径6.8cm、底径5.0cm、器高1.0cmを測る。Pit50 (A-2区) 出土。26・27は Pit115 (A-3区) 出土。26は口径7.0cm、底径5.1cm、器高1.4cmを測る。27は器周残 $\frac{1}{6}$ からの復元、口径8.4cm、底径6.4cm、器高1.0cmを測る。28は口径7.4cm、底径5.5cm、器高1.2cmを測る。Pit117 (A-3区) 出土。

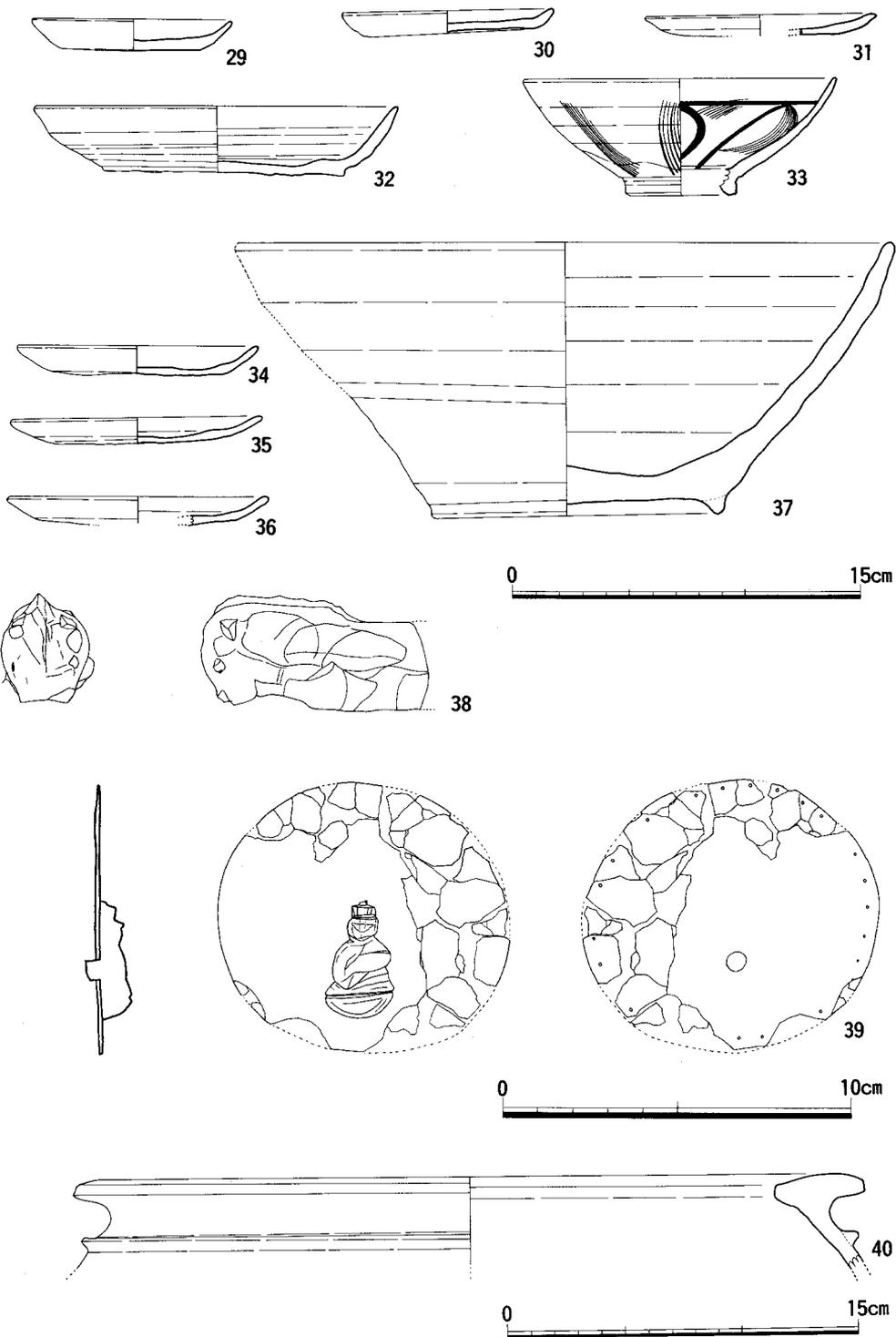
灰褐色粘質土出土遺物 (第12図、図版7・8) 旧谷部埋土中から出土した。

土師器

小皿 (29~31・34~36) 29は磨滅により底部切り離し方法は不明であるが板状圧痕がみられる。器周残 $\frac{1}{4}$ からの復元。口径8.5cm、底径5.8cm、器高1.4cmを測る。C-4区内出土。30は底部糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径9.2cm、底径7.0cm、器高1.0cmを測る。B-3・4区内出土。31は磨滅により、底部切り離し、調整は不明。器周残 $\frac{1}{4}$ からの復元、口径10.0cm、底径7.0cm、器高1.0cmを測る。C-3区内出土、34~36は底部へ



第11図 遺物実測図(1) (1/3)



第12図 遺物実測図 (1/2-1/3-1/6)

ラ切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底部はナデ。火中にあったためか灰色味を強く帯びる。口径10.3~11.2cm、底径7.3~8.7cm、器高1.2cmを測る。C-3区内出土。但し、36は器周残 $\frac{1}{4}$ からの復元。

杯 (32) 底部糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径15.6cm、底径10.3cm、器高2.9cmを測る。C-3区内出土。

同安窯系青磁小椀 (33) 器周残 $\frac{1}{4}$ からの復元。体部外面に櫛状工具による条線、内面にヘラと櫛状工具を用いて文様を施す。口縁部内面に沈線をもつ。釉は淡緑灰色で、外面底部は露胎である。胎土は灰色を呈する。C-3区内出土。

須恵器鉢 (37) 体部は直線的に開き、口縁部でやや内側に屈曲する。断面半円形の貼り付け高台を底部の外面にもつ。体部は横ナデ、内底はナデ。口径(復元)28.4cm、高台径12.6cm、器高12.0cmを測る。胎土には砂粒を多量に含み、灰色を呈する。C-3区内出土。

陶製馬形 (38) 須恵質の焼成で青灰色を呈する。両耳、口、四足、下半身が打ち欠かされている。全体的には手捏ねによる成形で、目は前方からヘラ状工具で刺突し、たてがみは上方につまみ出すことによって表現している。D-3区客土中より出土。旧谷部埋土中に二次推積の8世紀前半の須恵器片がみられたが、それに近い時期のものか。残存長9.5cmを測る。

銅製懸仏 (39) 鏡板に尊像を装着した状態で出土した。鏡板は直径7.9~8.4cmの不整円形の銅板である。裏から連珠文を打ち出しているが、表からは明瞭にみられない。上方には懸垂のための孔を2個所に穿っている。尊像は高さ3.4cmの半面鑄造のものである。細部は目鼻立ちもわからないほどに鑄上り、タガネで刻線を施し大まかに五体を表現しているが、頭上に化仏を頂き、腕の形状から右手は与願印を表わし左手は水瓶を持つ十一面観音とみられる。尊像の背面には鉸が付き、鏡板に挿入し先端をつぶし装着している。C-4区灰色土層出土。

甕棺 (40) 表採資料で、器周残 $\frac{1}{4}$ からの復元口径68cmを測る成人棺口縁部片である。逆L字状を呈し、口縁下ですぼまり三角突帯をもつ。弥生時代中期後半に属す。

V 小 結

SB01・SB10・SB11の柱穴掘り方からは、底部糸切りの土師器小皿片が出土しているが、SD02出土のものと同様な特徴を示す。SB13の柱穴はSD02を切っており、掘り方出土の土師器は細片がほとんどであるが、底部は糸切で板状圧痕がみられず新しい様相を呈する。SE03掘り方出土の土師器は、いずれも細片で特徴をみることはできない。削平後、上方に推積した層には口禿の白磁がみられ、14世紀に上限を置けよう。SK07はSD02を切っている。出土した土師器は細片化しているが、底部は糸切りで板状圧痕はみられない。SK08からは土師器特小皿細片が出土している。SX04から出土した土師器はいずれも細片で、特徴をみることはできない。埋土は他の遺構と異なり黒褐色を呈する。以上述べたことから、遺構の時期は大きく2時期に分けられる。SB01・SB10・SB11・SB02がⅠ期、SB13・SD06・SK07・SK08はⅡ期に属す。年代はⅠ期を13世紀、Ⅱ期を15世紀に求めることができる。SE03、SX04は不明。C-3・4区を中心とする一帯は、井戸の検出状況からみて、大きく削平をうけている。石組み地形の南側では、口禿の白磁片に伴ない懸仏が出土しているが、石組み地形の上部からの流れ込みであろう。旧谷部埋土に二次推積ながら、8世紀前半代の須恵器、11世紀代の土師器小皿がみられた。旧谷部が埋没した時は12世紀後半から13世紀前半までの間と考えられる。旧谷部埋土中から、外面に劃画文をもつ越州窯系青磁壺片4点が出土したが、胴部の細片で図化できなかった。図版8の41を参照されたい。第12図34～36の土師器小皿と同時期のものか。

懸仏、直接遺構とは結びつかないが陶製馬形の出土は、信仰・祭祀の点で、越州窯系青磁壺の出土は対外交渉の点で、今後長峰遺跡の全貌を解き明かす上での手がかりとなろう。

当遺跡は分布地図に長峰甕棺遺跡と記載されているように、甕棺片の散布地として知られていたが、今回の調査では甕棺に関する遺構は検出されず、甕棺片散布地の域を出なかった。

図

版

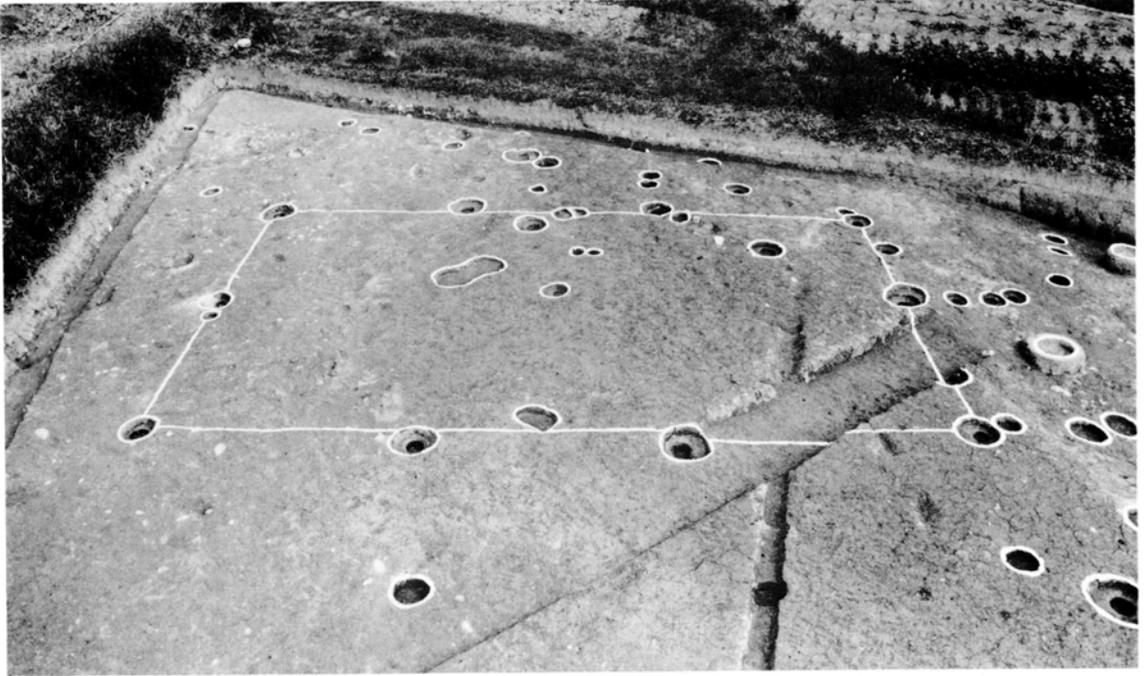


1



2

1 調査区全景（西から） 2 調査区全景（南から）



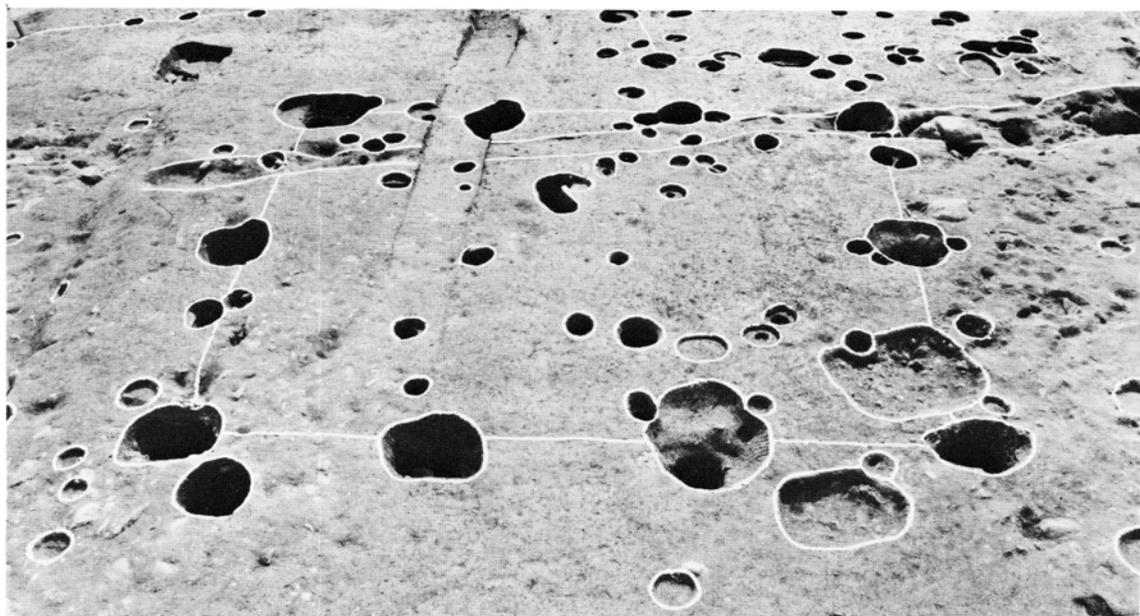
1



2

1 SB01 (西から)

2 SB10・SD02 (北から)



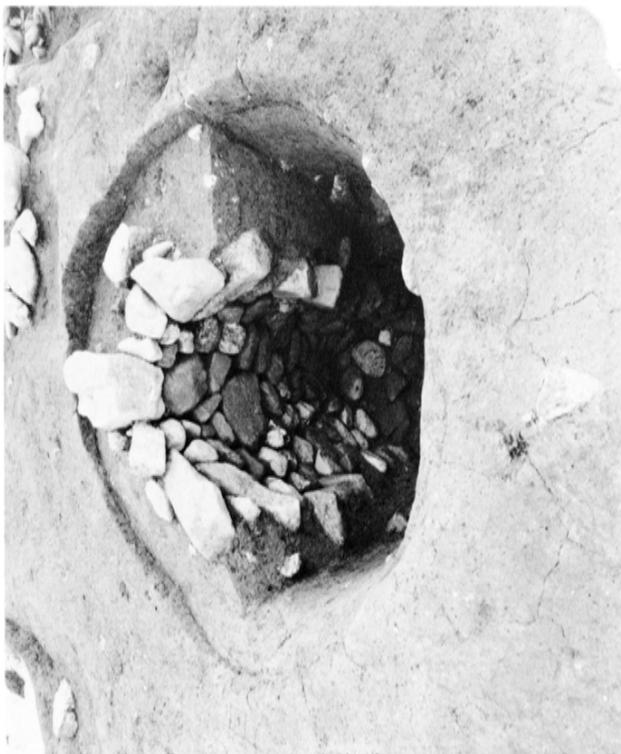
1 SB13 (北から)



2 SE03・石組み地形



1 SE03 (西から)
2 SE03断面 (西から)
3 SE03石組み近景 (西から)





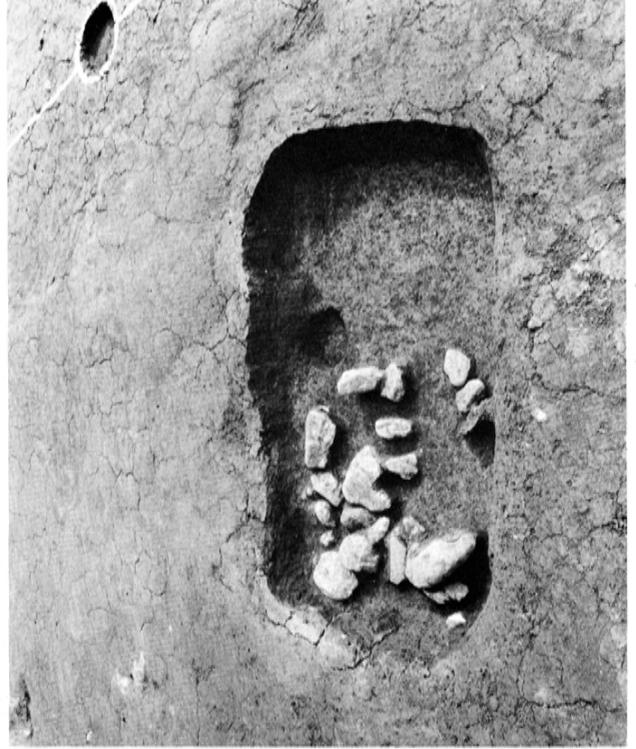
3



3 SD06土層 (北から) 4 懸仏出土状況 (西から)

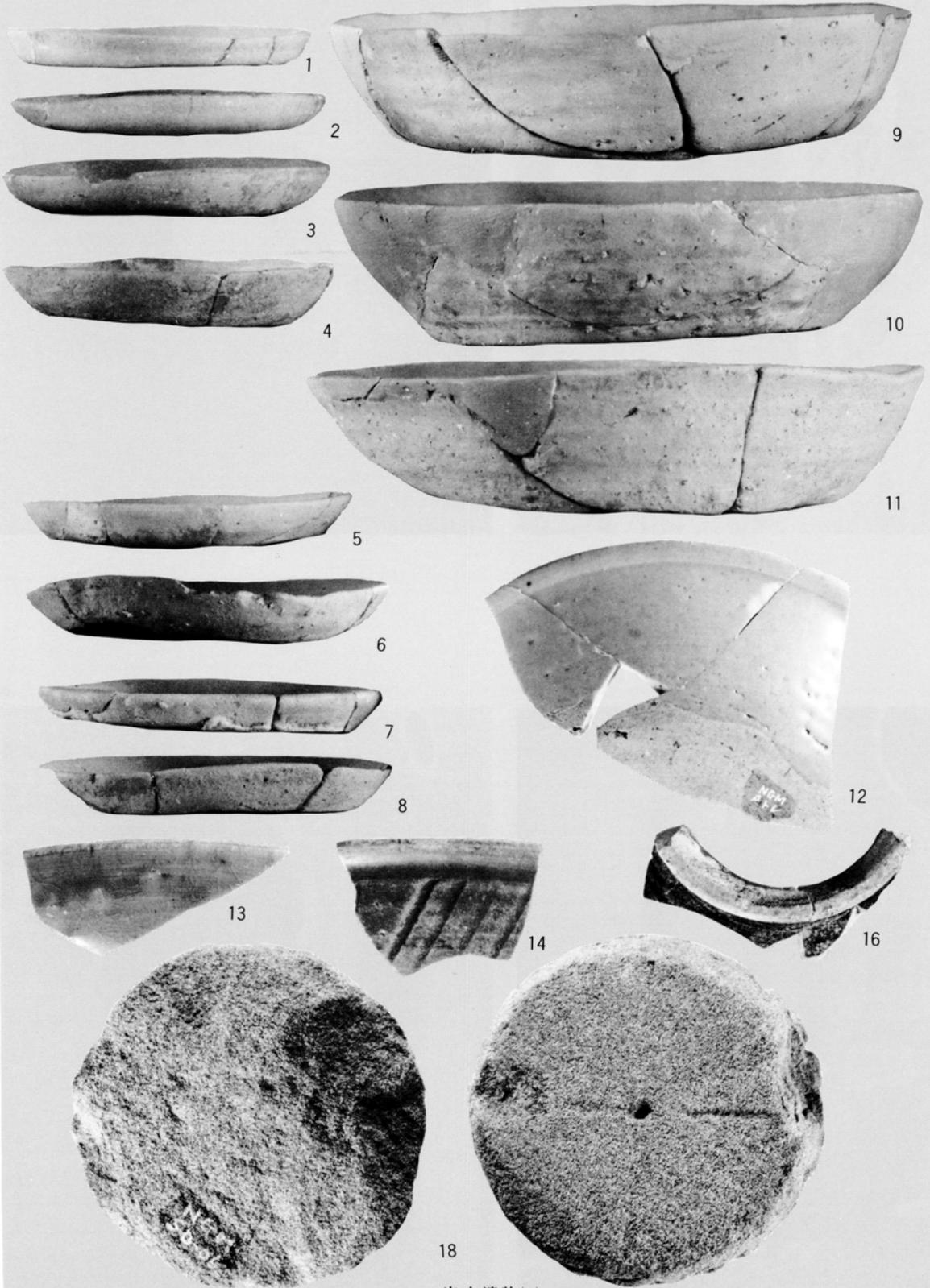


1

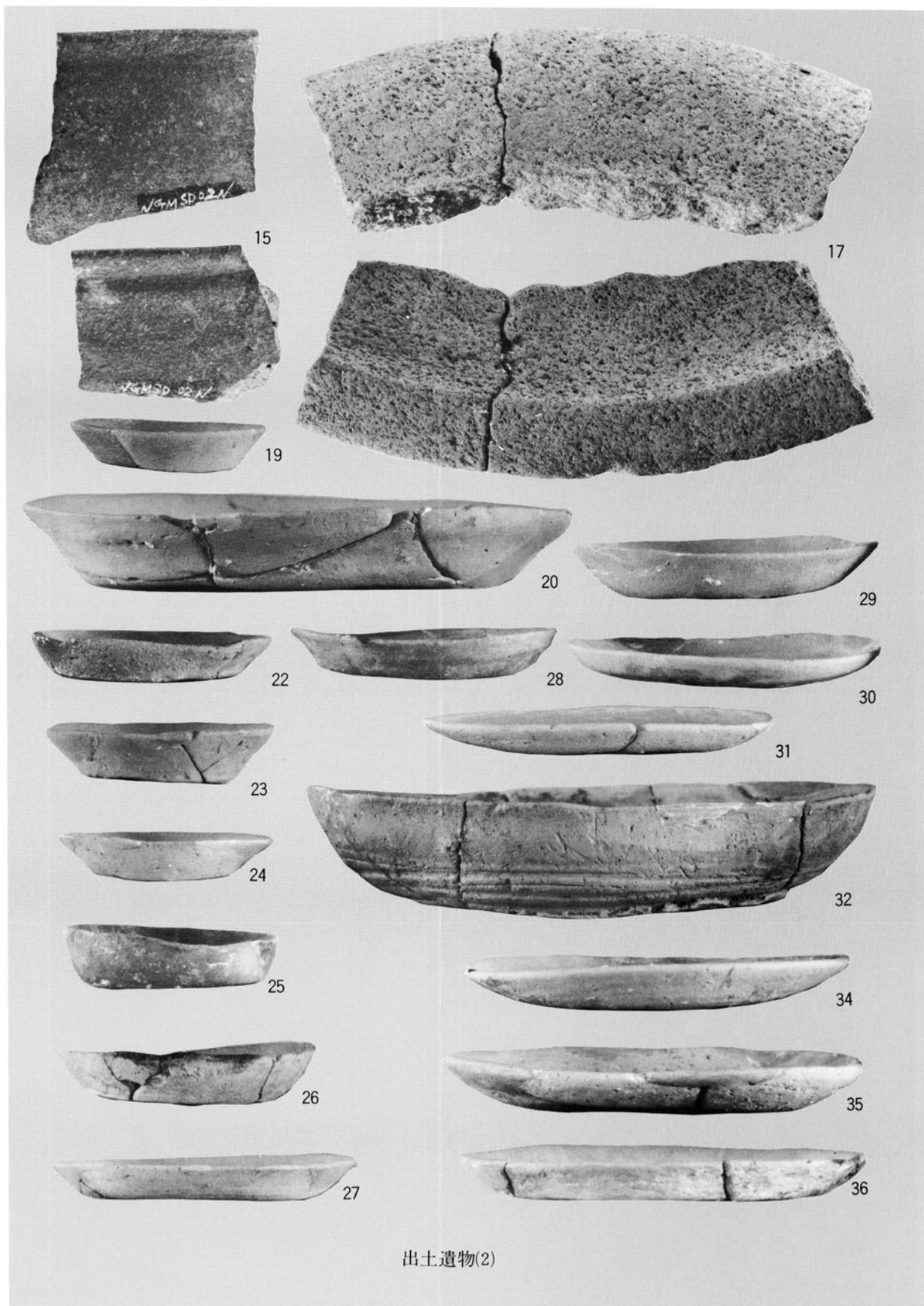


2

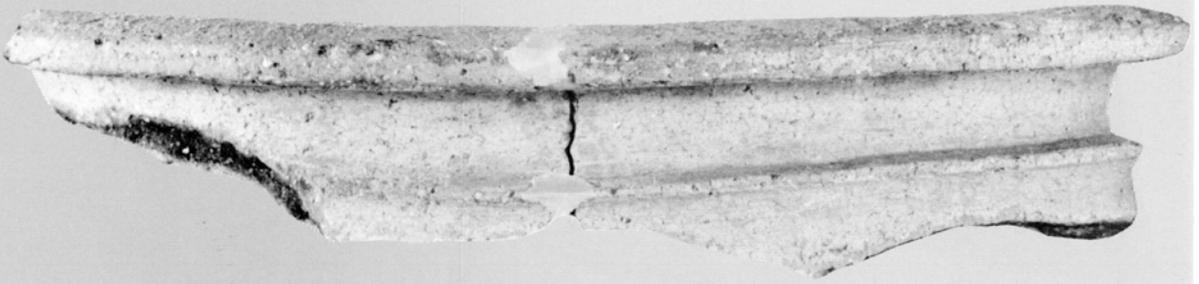
1 SK07 (南から) 2 SK08 (西から)



出土遺物(1)



出土遺物(2)



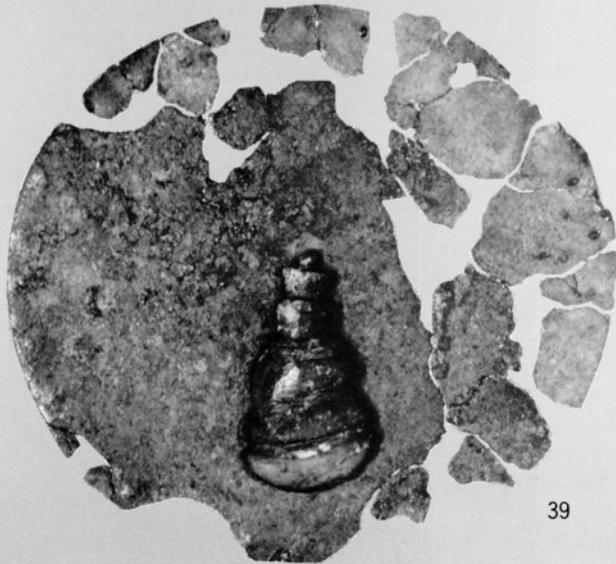
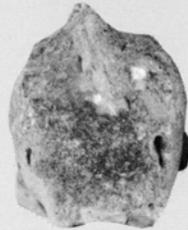
40



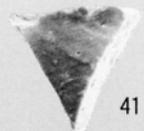
37



38



39



41

福岡市早良区
長峰遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第185集

1988年3月31日

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10の29
印刷 正光印刷株式会社
福岡市西区徳永877-1
